

熊野で元英国兵の追悼式 紀和の住民 墓地守る



墓地に献花する英国人ら

太平洋戦争中、旧日本軍の捕虜として熊野市紀和町の鉱山で労働を強制され、祖国に帰れないまま亡くなった英国兵16人の追悼セレモニーが11日、同町の英国人墓地で行われ、来日した当時の捕虜の親族ら7人を含む約50人が参列した。

セレモニーは、同町出身で英国在住の恵子・ホームズさん(66)が代表を務める支援団体「アガペ」が主催。1992年からこれまで300人以上の外国人が同墓地を訪れている。

戦時中、同町では英国兵300人が強制労働させられ、うち16人が病气などで亡くなった。終戦後、英国

兵の眠る共同墓地を地元住民が守り続けていることを知った恵子さんが、和解のきっかけにしたいと活動を始めた。

父親が捕虜だったスーザン・リチャードソンさん(63)は夫と息子と訪れ、「父はこの地で命を落とした仲間を忘れられないと言っていたが、地元住民とのふれあいもずっと覚えていた。息子と一緒にここに来られてうれしい」と語った。

恵子さんは「来年で戦後70年になるが、この墓地のことをもっと多くの人に知ってもらって、お互いが理解し合えるきっかけになれば」と話した。